論文審査の結果要旨

論文題名：
男性アルコール使用障害者に対する注意バイアス修正トレーニングの効果に関する研究---認知行動療法に参加した入院患者の単一施設介入---

申請者氏名：天野　良文（学籍番号：２０９１００２）

審査の所見

＜論文課題概要＞

アルコール使用障害（AUD）の治療に用いられる認知行動療法（CBT）に、注意バイアス修正(ABM)訓練を組み合わせて実施することで、AUD 患者の再飲酒リスクや渇望(craving)を低減できるかを検証した。AUD 男性入院患者 32 名を、2 群（①CBT＋ABM 訓練（介入群）と CBT＋ABM プラセボ訓群（対照群））に分け、アルコール再飲酒リスクと craving がそれぞれ低減するか検討した。結果、いずれにおいても ABM 訓練による上乗せ効果はみられなかった。

＜研究内容＞

アルコール使用障害（AUD）患者の特徴的な症状として渇望（craving）が知られ、これが再飲酒リスクと関連しているとされる。またアルコール探索行動および再飲酒の誘因として、アルコール関連刺激の偏った認知処理、すなわち AUD 患者にはアルコールに対する注意バイアス（AB）があるとされる。そこでアルコール依存の治療に用いられる認知行動療法(CBT)に AB の修正(ABM)訓練を組み合わせて実施することで、AUD 患者の craving や再飲酒リスクをさらに低減できるという仮説を立て、研究を開始した。

入院中かつ離脱管理期間が終了した AUD 男性患者のうち、研究参加に同意した 32 名を対象にした。全員に CBT（週 1 回 80 分間、6 回）を実施し、介入群には ABM 訓練を、対照群にはプラセボの ABM 訓練を実施した。主たる評価項目には、アルコール再飲酒リスク評価（ARRS）と craving（VAS）を用い、副次アウトカムには、AB 反応時間（AB-RT）を用いて 1 週目と 6 週目に評価した。Generalized Linear Model (GLM)を用い、各測定項目を応答変数とし、介入群/対照群（group）と介入期間（time）を説明変数、共変量には年齢と各測定項目の初期値を投入した。

介入群 16 例と、対照群 16 例を解析した結果、ARRS には group と time の相互作用はなく、time の主効果がみられた。Craving (VAS)には、相互作用、主効果ともにみられなかった。すなわち本研究では、入院中の CBT プログラムを受講した男性 AUD 患者では、再飲酒リスクと craving の両方を低減させたが、ABM 訓練の上乗せ効果は認められなかった。

本研究で ABM 訓練が再飲酒リスクや craving を直接的に低減させることができなかった理由として、craving 自体が前頭前野を中心とした大脳新皮質の機能低下による、上からの抑制解除にともなう大脳辺縁系/基底核（大脳旧皮質）の過剰賦活に基づくため、前頭葉機能の修正を目的とした ABM 訓練では効果がなかった可能性などを指摘した。

＜科学的到達・新規性＞

本研究は、臨床に基づいた課題を解明すべく計画された研究であり、研究手法には新規性はみられない。ただアルコール依存症治療専門病院に長年、作業療法士として勤務しながら、日常業務の中から問題点を発見し、それに対し研究計画を立案し、データを収集・解析し、論文化したという事実の前には、数多くの困難があったことは容易に想像される。この点は高く評価したい。

また本研究では、Monti らの Coping Skills Training を自分たちで翻訳し、一部表記を日本人に合わせた独自のワークブックを作成した。また治療者間の治療効果差がなくなるよう、スタッフ用のマニュアルも準備し、それを用いて CBT を実施したという。この点も評価できる。

＜発展＞

得られた結果がいずれも当初の仮説が棄却されるものであったが、申請者本人がその問題点や限界を十分に理解しており、今後も研究を継続・発展させてゆくことが、口述試験で確認できた。さらに審査員からの指摘を受けて後日再提出された改訂論文では、結果の解釈が適切に修正され、この領域における研究の現状把握（文献検索を含む）も一層充実し、また本研究の限界や、今後の課題・展望についても十分に言及された。

以上のことから、本論文は博士（健康科学）の学位授与に値するものとして認める。

【審査員】

主査：滑川　道人

副査：関　　美雪

副査：曽根　稔雅